



筆者は質的調査の方法を、「聞いてみる」のインタビュー調査、「やってみる」と「行ってみる」の参与観察、フィールドワーク、「読んでみる」文献資料調査の四つに分類する。

参与観察では、同じ仕事を「やってみる」ために、男性客を接待するホステスや暴走族の「パシリ」を実際にやっている。資料調査では、758冊の「就職自己分析マニュアル」を研究対象とした牧野智和が、次のように述べている。一見果てしない文献データベースの内に、画然とした境界を作ること、「すべてを読み、すべてを研究」することはできなくても、「主なものをほとんど全部読んだ」ことになる。さらに毎年版が改められるほどの売り上げを誇る9割近くは、改定箇所が少なく、ほぼ読まなくてよい。



前田拓也、秋谷直矩、朴沙羅、木下衆 編

2484円 ナカニシヤ出版

☎075-723-0111

最強の社会調査入門

これから質的調査をはじめる人のために

古本の半数はネット等でタダ同然で買える。このようにハードルは高そうに見えても、「愚直に」やってクリアできたという。評者は考える。教師にとつては、教育実践をルポではなく、論文として仕上げようとする。困難なハードルが立ちちはだかる。普遍性、客観性、根拠などが問われるからだ。だが、他方で、研究者に対して

も、細分化された領域における目的や既存の方法に対しての批判が高まっている。量的調査などが正しい手続きで行われたとしても、方法の選択自体が妥当だったのか、さらには目的が意義のあるものなのか問題にされる。既存の研究は全体的観点からの体系化が進んでおらず、変化に対応すべき教育現場の臨床とは遊離していることが多いのだ。その点でこの本の示唆は意義深い。教職大学院においても、そのような成果が求められると考える。

(聖徳大学教授・西村美東士)